



Title	相互《異化》のネットワーキングと「共生」
Author(s)	宮内, 洋
Citation	北海道大學教育學部紀要, 64, 85-88
Issue Date	1994-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29438
Type	departmental bulletin paper
File Information	64_P85-88.pdf



相互《異化》のネットワーキングと「共生」

宮内 洋

The Networking of Interactive changing and 'Kyohsei'

Miyauchi HIROSHI

1) 問題意識

社会学におけるエスニシティ研究の雄である梶田孝道は従来の社会学を批判し、「社会学の国際化」を声高に提唱する。「国際化」を言えばすぐに欧米人を思い浮かべるのは、何も梶田だけに限らない。日本社会に生きる「日本人」の多くは、日本国内の自らの基盤を省みることなく、外の“ありがたい”存在との関係のみを「国際化」と捉え続けてきた。この批判から逃れられる「日本人」は、筆者を含めてほとんどいないことだろう。

梶田の言うとおり、従来の日本社会の社会学的テーマが日本社会の自足性を前提にして議論することが可能であったとするのならば、それは日本国内には均質な「日本人」しか生活していないと恣意的に措定し、議論することが厄介になる異質な存在はすべて捨象してきたからであろう。

特に、近年まで日本国内の社会科学の領域においては、「歴史的経緯」をもつ「外国人」に対する研究者による調査研究はほとんどなされてこなかったと言っても過言ではない。しかし、ここ数年の間に、二人の研究者によって「在日朝鮮人」を「対象」にした調査研究の結果が相次いで上梓された。一つは人類学者原尻英樹による『在日朝鮮人の生活世界』であり、もう一つは社会学者福岡安則による『在日韓国・朝鮮人』である。「日本人」という自己呈示をしている二人の研究者は、自ら行った調査から「在日朝鮮人」の分類モデルを導き出した。長年の間、この領域がタブー視されていたことを考慮に入れると、これらの業績は非常に重要な意味をもっている。けれども、この二つの研究にとって「在日朝鮮人」という存在は「対象」に過ぎないから、フィールドワークや聞き取り調査とその方法論は様々であっても、結局は彼／かの女たちの分類で終わっている。これはエスニシティ研究においてもっとも重要である、研究者自身も同じ地平に立つ「生活者」であるという意識が欠落しているからではないだろうか。筆者はこれを十分に認識したうえで、「在日朝鮮人」と「日本人」の関係の在り方を問うことを、自らのエスニシティ研究の課題として設定した。

2) 方法

日本において「日本人」がエスニシティ研究を行うに当たって、加害者－被害者の図式からは逃れることはできない。筆者は「日本人」という消し去ることのできないエスニシティを自分の中に十分に自覚することによって、そこから見えてくることは何かということを自らの経験から掴もうとした。それは、先のお互いが日本で生活する「生活者」同士であるという視点と共鳴し合うものであり、後述するエスニシティ間の関係の構築にも連なっている。

よって、筆者はこの数年間、人類学においてはポピュラーな方法であるフィールドワークを行っ

てきた。以下は、その筆者が行ってきたフィールドワークの概略である。

- ① 帰化した「在日朝鮮人」女性に対する、生活史を中心としたインタビュー形式の聞き取り調査。
- ② 札幌市内の区役所戸籍担当者に対する聞き取り調査および職員組合に対する機関調査。
- ③ 朝鮮の民族楽器を演奏するグループへの参加。

この中で、メンバーに対する生活史を中心としたインタビュー形式の聞き取り調査。

- ④ 札幌市役所内での公務員および教諭における国籍条項に関する意見交換会における会話分析。
- ⑤ 「川崎市ふれあい館」におけるフィールドワーク。特に館長への聞き取り調査。
- ⑥ 大韓民国から日本へ嫁いできた女性に対するインタビュー。
- ⑦ 札幌市内の市民運動ネットワークに関する調査（特に、女性問題）。
- ⑧ 青年層におけるエスニック・アイデンティティに関する調査。

これらのうち、修士論文において直接的に言及したのは③についてである。特に、修士論文の第2章において、公の場で語られた言説をもとにエスノグラフィーとして構成している。ただし、個人の生活史は記述していない。

3) 背 景

上記の③のグループは1990年に誕生し、朝鮮の打楽器「チャング」の練習を行うことを現在はメインの活動としている。現在、週に一度の練習には筆者を含めておよそ10名前後のメンバーが参加している。メンバーは「在日朝鮮人」のみで構成されているわけではない。国籍は「朝鮮籍」、「韓国籍」、「日本籍」と三つに分かれている。筆者を含めて2名のみが男性である。半数は既婚者であり、子どもがいる。メンバーの子どもたちは母親／オモニに連れられて、大体練習にやってくる。この普段の練習とは別に、公演活動がある。これは集会やセレモニー、芝居での客演という形態がほとんどである。1993年は10回以上の公演があり、グループのメンバーはかなりの疲労状態にあった。ましてや、メンバー間でなぜその公演に出演するのか等について話し合う時間的余裕などまったくなかった。

このような中で、ある市民学校のプログラムの中の「私たちの文化ー在日としてー」と題された講座に、グループは講師として出演することになっていた。しかし、メンバーのある「在日韓国人」女性が、その出演を拒んだ。グループのメンバーの半数近くは、その市民学校のスタッフでもあったためにグループは動揺した。そこで、グループ内部で出演をめぐる話し合いが行われることになった。第1回目の話し合いは1993年10月22日に行われ、第2回目は11月2日に市民学校の中心人物を招いて行われた。その後、またメンバーだけで11月5日に第3回目の話し合いがもたれた。

結論から言えば、グループは全員一致で出演することとなった。しかし、講師として出演するわけではなく、あくまでその枠の中で公演を行うという形態をとった。ここで、重要なのは出演決定自体にあるのではなく、話し合いの途中で交わされた意見の衝突とその衝突の後にグループが生んだものである。ちなみに、公演当日は母親と女性教師の集会と日時がぶつかり、舞台上に上がるグループの出演者の数が受講者を上回るといった状況だった。

4) 考 察

(1) 衝突

このグループの話し合いにおいては、二つの衝突のベクトルが交錯し合っていた。一つは「日本人」と「在日朝鮮人」との衝突のベクトル、もう一つは「在日朝鮮人」におけるいわゆる《北》と《南》の衝突のベクトルである。

a) 「在日朝鮮人」と「日本人」

ある「日本人」メンバーAは朝鮮の音楽に感動して、他の「日本人」にも一人でも多く朝鮮の文化に接してほしいと考え、グループの出演を主張する。

一方の「在日韓国人」メンバーBとCが出演を拒むのは、自らが「在日」として胸を張って「日本人」の前に出ることができるほど、まだ内実を伴っていないと自己を見ているからである。かの女たちにとってグループは朝鮮の文化を学ぶ場であって、そこから独自の「在日」の文化をつくっていきこうとしている。また、「在日朝鮮人」メンバーDは出演には賛成しているけれど、以下のとおりAとはその理由は大いに異なっている。

b) 「在日朝鮮人」における《北》と《南》

Dが出演に是が非でもこぎつけたいと思う気持ちは、一人でも多くの「同胞」に出会いたいという気持ちから生じている。ある場で彼女が語った「もうこれ以上、迷子にはなりたくない」という言葉が象徴しているように、「朝鮮籍」の彼女は、「韓国籍」が大部分の「在日」の中でもマイノリティに属することになる。《北》のネットワークを離れれば、「日本人」の中で孤独感を味わうことになるのである。

一方のBとCが出演を拒むのは、上記のとおり、グループは朝鮮の文化を学ぶ場であって、現在は「在日」の文化をつくっている最中だと考えるからである。この背景には、日本の教育と職場をくぐらざるを得なく、そこで社会化してしまう「在日韓国人」のおかれている状況がある。また、そのうちの一人はグループ内部の「在日」同士でもまだ同意がなされていないまま、『在日として』という「在日」を一括して捉えたタイトルでは出演などできないとも語っていた。

(2) 合意そして導き出された知見

この意見の衝突は、3回の話し合い毎の一定の合意を経て、最終的にはメンバー全員によって市民学校の講座への出演という結論に達して解消された。

上記のとおり、メンバー各自はそれぞれが異なった存在としてあり、その異なった基盤を背景に各々の意見は衝突している。両者は自己とは異なった存在であると他者を認識した上で、相手に意見を聞く中で自己の基盤を相対化し、それまでの自己とは異なった存在に変化している。すなわち、相互に《異化》され合っているわけである。互いに《異化》された両者の間には共通の理解、さらには共通の価値観が築き上げられる。例えば、3回の話し合い毎の一定の合意事項ができあがってきることが、これに当たるだろう。外への活動は重要だが、内の活動を蔑ろにしてはならないという、リフレクションの回路がはっきりとメンバー全員によって認識されたのである。このような異なった者同士の共通の基盤は互いが《異化》していくプロセスをたどる中からしか出ては来ないと筆者は考えている。それこそが、権力者であったり、システムであったりす

るところから押し付けられた価値観ではない、「民衆」自身によって編み出された価値そのものと言えるだろう。この価値は、金子郁容がボランティアを経験した者の心の状態として述べたように、「何か」として心のどこかに引っ掛かったままの状態でばんやりと存在するわけではない。確かなネットワーキングとして、いつでもお互いをバックアップする形態として存在しているのである。バラバラの個々人のそれぞれの心の中の「何か」は形となって結実化し、それがネットワーキングの集合体（ネットワーク）となり、今度はこのネットワークが個人を《異化》していくのである。このグループにおいては、「日本人」と「在日朝鮮人」の両者と、「在日」においても《北》と《南》の両者が相互に《異化》されることによって、日本社会の中で共通の基盤を作り上げていっている。と同時に、「在日朝鮮人」メンバーは「在日」としての文化を体内に蓄積し、「在日」としての誇りをもてるように努め、一方「日本人」メンバーは自らが「日本人」であることを真剣に問うことによって日本社会の中の自らの位置を再確認し始めている。このような、相互に《異化》され合うネットワーキングが常に行われている状態こそが、多民族・多文化の中の「共生」の真の姿なのではないだろうか。

また、この相互に《異化》され合うネットワーキングは、いかなる場合においてもなされるわけではないことも付け加えておかねばならない。条件が必要となるのである。内なる共通の価値に基づいて外部に対して閉鎖的につながっているネットワークにおいては、ネットワーク内で《異化》され合う可能性はほとんどない。他者が自己と異なっていなければ、自らが《異化》するためには自らが属するネットワークを飛び出るしか方法はないからである。しかし逆に、誰に対しても開かれているネットワークだけでも十分ではない。上記のグループにおいては、メンバーがグループの意義を十分に理解して続けていこうとする意志を持っていたために、このグループは崩壊の危険を免れ、メンバーの誰一人として辞めることにはならなかった。これは、このグループがネットワーク外部の価値観に支配された、内なる価値観をもたぬネットワークではなかったからである。外との関係を拒否することなく開放的にあり、なおかつメンバー全員によって生み出された内なる価値観を基盤とするネットワークこそが、相互《異化》のネットワーキングを保証するものであり、逆にこのネットワーキングが常に行われることによって「開かれたネットワーク」は存在し続けるのである。

5) 今後の課題

各々の概念が深化していないのは、各々の個人の《異化》の契機の把握の不十分な点にある。個人の生活史における《異化》の契機は、2年間のフィールドワークで到底把握できるものではなかった。逆にそのことによって、個人の《異化》の契機は、その個人の被差別体験と差別体験の両者に密接に連なっていることが明らかとなった。上記のグループにも《異化》以前の時間を補うかのように、現在において強い焦燥感を持つ人たちが少なくはない。だからといって、その契機は話されることがないのかというと、筆者はそのようには考えてはいない。つまり、相互《異化》のネットワーキングがなされる限りそれらは対象化され、個々人は過去の被差別体験および差別体験、ひいては過去の差別を生み出す価値観に支配されたままではない“靱い”存在となるはずであるからである。